

靈樞講義

2020年12月13日

九鍼十二原篇

【序段】

（第1節）

黄帝問於岐伯曰、
余子萬民、養百姓、而收其租稅、
余哀其不給、而屬有疾病、
余欲勿使被毒藥、無用砭石、
欲以微鍼、通其經脉、調其血氣、營其逆順出入之會、
令可傳於後世、必明爲之法令、

（第2節）

終而不滅、久而不絕、
易用難忘、爲之經紀、
異其編章、別其表裏、
爲之終始、令各有形、
先立鍼經、願聞其情、

（第3節）

岐伯荅曰、臣請推而次之、令有綱紀、始於一、終於九焉、請言其道、

【第1節】

黄帝問於岐伯曰、

（黄帝 岐伯に問いて曰く、）

（黄帝が岐伯に質問して言った、）

*「黄帝問」は、第6段のはじめにもある。問答でいえば、本篇は前後2段に大別することもできる。

余子萬民、養百姓、而收其租稅、

(余は、万民を子とし、百姓ひやくせいを養い、其の租税を収む。)

(私は、万民を子とみなし、百姓を養い、租税を徴収している。)

*子は、自分の子供のように愛すること。また孳(いつくしむ)に通じる。親が子を養い(万民をいつくしみ、百官を養い)、子は親に孝養を尽くす(租税を収む)のは、親子関係の「孝」が背景にあると思われる。

*「百姓」は百官(多くの官吏)。

余哀其不給而属有疾病、

(余は、其の給らずして属ねて疾病有るを哀れむ。)

(私は、彼らが食料が足りずに、病気が絶えないことを哀れんでいる。)

*「不給」は、食料が足りないこと。栄養が足りずに病気が絶えないのは、政治的な失策であるから、黄帝がこうした発言をするとは思えないが。

*「不給」は『太素』の「不終」(終えず)ならば、寿命を極めないこと。病気で短寿なこと。

*「属」は、「続」に通じて、連続(連ねて)の意。人民が連続して病気にかかっている。

*「属」は、あるいは「族」に通じて、哀れむの意。寿命を全うしないことを哀しみ、病気にかかっていることを哀れむという意味で、「余、その終せざるを哀しみ、而して疾病有るを属あわれむ」とも読める。

余欲勿使被毒薬、無用砭石、

(余は、毒薬を被のましむる勿く、砭石を用いる無きを欲す。)

(強い作用のある毒薬を服用させたくない。強い刺激の砭石を用いたくない。)

*『素問』奇病論に「所謂無損不足者、身羸瘦、無用鑿石也」(不足を損なってはいけないというのは、身が羸瘦している場合、鑿石を用いてはならないこと)とある。

*「被」は「服」に通じる。服用の意。『孝経』応感の「無思不被」(思おもういて被おわざる無し)を陸徳明の『経典釈文』は「被、本作服」という。

*『素問』異法方宜論篇に「砭石者、亦従東方来」(砭石は東方由来である)、「故毒薬者、亦従西方来」(毒薬は西方由来である)とあり、「故九鍼者、亦従南方来」(九鍼は南方由来である)からすれば、強い作用、強い刺激を嫌っているだけではなく、自国(南方)優位、九鍼の優

秀性をアピールしているとも考えられる。

欲以微鍼、通其經脈、調其血氣、當其逆順出入之会、

(微鍼を以て、其の經脈を通じ、其の血氣を調え、其の逆順・出入の会を營せんことを欲す。)

(微鍼を使って、經脈を疏通させ、血氣を調え、逆順を処理し・出入の会を修繕したいと希望する。)

* 「微鍼」は九鍼と同義。『素問』異法方宜論篇に「南方・・・其治宜微鍼、故九鍼者、亦從南方來」(南方は・・・、治療は微鍼が適している。故に九鍼は南方由来という)とある。

* 「通其經脈、調其血氣」は、『素問』調經論「取之經隧、取血於營、取氣於衛」とあるところをみると、經脈の治療、血の治療、氣の治療、それぞれと思われる。營・衛は、「於營」「於衛」と場所を示す「於」があるので体表の層次を指し、營血・衛氣を直接意味しないと思われる。

* 「當其逆順出入之会」：別紙参照

令可伝於後世、必明爲之法令、

(後世に伝うべくして、必ず明に之が法令を為る。)

(教わった内容を後世に伝えるために、きちんと規範を明文化しておきたい。)

* 「法令」は、規範・模範。後世に伝えるために明文化したい。「世」と「令」が韻を踏む。『太素』楊上善注も「法令、即鍼經法也」というので、「法令」で区切るのがよいと思われる。「令」を下句に所属させ「令終而不滅～」と「令」を使役に読むこともできる(東洋学術)。

* 「明」は「暗」と同じく副詞。暗示・明示と同じように、「暗に為る」が人知れずこっそり作るに対して、「明に為る」は表に出してはっきりと作ること。明文化。

【第2節】

終而不滅、久而不絶、

(終わりに滅びず、久しくして絶えず)

(明文化しておけば、この世が終わっても無くならないし、年月がたっても中断しない。)

*第2節は4字1句で韻を踏む文章。類似の表現が『素問』六微旨大論に「令終不滅、久而不絶」とあり、六元正紀大論には「令終不滅、久而不易」とある。本句以降は第1節末の「法令」に対する注釈文と思われる。

易用難忘、為之經紀、

(用い易く忘れ難く、經紀を作り、)

(利用しやすく、覚えやすいように、筋道だった内容とする。)

*「經紀」は『内経』でよく使われ、『素問』陰陽応象大論篇「四時陰陽、盡有經紀、外内之應、皆有表裏、其信然乎」、『素問』皮部論篇「余聞皮有分部、脉有經紀、筋有結絡、骨有度量」などとある。

別其表裏、異其編章、

(表裏を別け、編章を異にし、)

(わかりやすいように前後に分け、篇・章を小分けにする。)

*前後の句が4字句なので、「異其章」は『太素』は「異其編章」に作るのを是となす。

為之終始、令各有形、

(終始を為り、各おの形を有らしむ。)

(終始を作り、それぞれに模範を持たせたい。)

*「形」は「型」に通じ、模範・枠組み。

*「形」は、『靈枢』根結篇に「九鍼之玄、要在終始、故能知終始、一言而畢、不知終始、鍼道咸絶」とあり、九鍼か刺法について書かれているらしいので、「形」は九鍼の形と思われる。あるいは、『靈枢』終始篇に「凡刺之道、畢于終始、明知終始、五藏爲紀、陰陽定矣」とあり、『靈枢』脹論「故五藏六府者、各有畔界、其病各有形状」とあるので、藏府病の病形を言うとも読める。

先立鍼経、願聞其情、

(まず鍼経を立てん。願わくば其の情を聞かん。)

(まずは鍼経を成立させたい。その治療について教えてほしい。)

(第3節)

岐伯答曰、臣請推而次之、令有綱紀、始於一、終於九焉、

(臣請う、推^{すい}して次し、綱紀有らしめ、一に始まり、九に終わらん。)

(どうか、推して編集し、筋道をたて、一に始まり九に終わる構成にすることを許可してほしい。)

*諸注は「岐伯」以下で段を分けるが、第2段「小鍼之要」の前まで、つまり次句の「請言其道」までを序段とするのが良い

*個人的には、第1節・第3節が序文であり、第2節は後から付けた注釈と思っている。

*「始於一、終於九焉」は、九鍼十二原篇の中に九篇があるとみなす(丸山説)、「小鍼之要」(第2段)から「九鍼」(第4段)までを指す(郭説)、九鍼を指す(家本)など諸説ある。また、『靈枢』九鍼論に「始於一、而終於九」、『素問』三部九候論に「天地之至数、始於一、終於九焉」、『靈枢』外揣「夫九鍼者、始于一、而终于九」、『靈枢』九鍼論「九鍼者、天地之大数也、始於一、而終於九」とある定型句であるし、後から付けた注釈文と考えれば、九という数字にとくに意味がないと思われる。

*「推」は、陰陽家の用語。一定の法則から万象を推測・類推すること。浅野裕一『諸子百家』(講談社学術文庫)は、「鄒衍は、二つの学説を形成するに当たって、推という特異な思考方法を駆使している」「鄒衍の思考態度には、事実に基づく類推と仮説の設定という、一見科学的精神と呼べる性格があったように理解できるかのようである。しかしこうした理解には、実は重大な危険が潜んでいる。というのは、所詮は限界のある現実観察の結果を基礎に据えながら、無限の彼方にまで推測に推測を重ねる行為は、結局は科学的立場とは完全に解離する事態に陥らざるをえないからである」という。鄒衍(前305～前240)は、斉の出身で、戦国中期から後期にかけて活躍した。「推」の用例としては、『素問』陰陽離合論「陰陽者、数之可十、推之可百、数之可千、推之可萬、万之大、不可勝数、然其要一也」、『素問』五藏生成論篇「五藏之象、可以類推」、『素問』靈蘭秘典論篇「千之万之、可以益大、推之大之、其形乃制」などがある。陰陽五行説で身体の営みを推測することなどが、推に当たり、こじつけ的でもある。

請言其道、

(請うその道を言わん。)

(どうか学説をのべるのを許可してください。)

*ここまでが『鍼経』の序文で、九鍼十二原篇の序文ではなく、また九鍼十二原篇の本文でもないと思われる。

2020年12月13日 別紙資料

（欲以微鍼、通其經脈、調其血氣、）營其逆順出入之会

〔1〕序論

東洋学術「①微鍼を用いて経脈を通じさせ、②気血を調和させ、③経脈中の気血の往来、出入や会合を正常に回復させたいと考える。」

⇒逆順を往来と解釈している。出入・会合はなにも解釈していない。

⇒①と②を行えば、③になる、という。③は治療の結果。

家本「そこで細くて小さい鍼によって、①経脈即ち血管神経複合体の流通を良くし、②血液や神経の機能がバランスを失わない様に調節し、③経脈や血気が往来、出入して、その機能状況が反映される場所であるツボ（腧穴または経穴）を適切に運営したいと思う。」

⇒逆順を往来と解釈している。出入は解釈せず、会はツボと理解している。

⇒経脈の延長線上に在る①②③治療を行う。

◎序段を『鍼経』の序文と考えるならば、序段に含まれる「欲以微鍼、通其經脈、調其血氣、營其逆順出入之会」は、『鍼経』のさまざまな治療を代表させていると考え、①経脈疏通治療、②血気調整治療、③逆順出入治療、と見なしたほうが良いが、逆順出入治療とはどのようなものだろうか？

〔2〕まとめ

【營の意味】

①運営する（処理する）

②營繕する（直す）

（動詞の共用）

①「其逆順出入之会を營す」

一般的な読み方。「逆順と出入の会を修繕する」と解釈できる。たとえば、経脈が逆乱したり、出入している場を修繕すると解釈すれば、「通其経脈」と同じ事になる。

②「其の逆順を営す」「出入之会を営す」

「営」を修辞法の動詞の共用とみなせば、「逆・順を営し」「出・入の場を営す」と読むことができる。「逆証・順証を処理し」「正気出・邪気入の場を修繕する」となれば、急性熱病の治療ということになる。

【逆順の意味】

- ①行の逆順（経脈循行方向）
- ②病の逆順（逆証・順証）
- ③順行・逆行（惑星用語として）
- ④偏義詞（逆に意味がある）

【出入の意味】

- ①出入り（体内へ入り、体外へ出る）
- ②経脈の起点と入点
- ③往来（行き来）と同義

【会の意味】

- ①会場
- ②交会の場（2者が交わる場）

〔3〕結論

（逆順）②病の逆順（逆証・順証）

（出入）①出入（体内へ入り、体外へ出る）

（会）②交会の場（2者が交わる場）

（営）は共用で「営其逆順出入之会」は「営其逆順・営出入之会」

正気が洩れ出、邪気が侵入して発症した急性熱病の治療をいう。

急性熱病には、逆証と順証があり、これを適正に処理したい（営）。

正気が洩れ出る・邪気が侵入する・交会の場を適確に治療を行いたい（営）。

*この場合の正気は、衛気・真気連合軍の皮膚防衛力（狭義）。

*中医学の「身体の生理機能や抵抗力を正気と呼ぶ」（広義）とは分けたい。

〔4〕各論

【逆順の意味】

①行の逆順（経脈循行方向）

『靈枢』経脈篇では、陽経は上から下へ循行し、陰経は下から上に循行するのが、順行である。『靈枢』逆順肥瘦篇に「少陰独下行」とあり、陰経は上行すべきなのに、少陰経だけが上から下へ循行する（逆行する）のはなぜかという質問がある。

しかし、経脈の循行方向は、『靈枢』経脈篇で示されたのを基準とすれば、すべてが順行といえる。「少陰独下行」というのは、別の流派の考え方で、経脈篇からみれば逆行にあたる。経脈そのものが、逆流していることではない。

『靈枢』官能篇「用鍼之理、必知形氣之所在、左右上下、陰陽表裏、血氣多少、行之逆順、出入之合」とあり、鍼治療で大事なことは「形氣の所在（の左右上下、陰陽表裏）、血氣の多少、行之逆順、出入の合」を知ることだという。

◎「行之逆順、出入之合」は「営逆順出入之会」に似ているので、「営（行之）逆順・出入之会」で、経脈循行を営繕（修繕）し、出入の会を営繕する、と解釈できるが、これでは、東洋・家本と同じである。

②病の逆順

病気の予後をいう。予後良を順といい（順調に推移する）、予後不良を逆という（順調に推移しない）。おおむね急証・熱証に用いられる。『靈枢』玉版篇・五禁篇などに記載がある。

九鍼十二原篇に「往者爲逆、來者爲順」（往期は予後不良。来期は予後良）

『靈枢』根結篇に「故曰、刺不知逆順、眞邪相搏」（逆順を知らないで鍼刺すれば、眞氣と邪氣がぶつかり合う）とある。

◎となれば、「営逆順出入之会」は「逆順・出入之会を営す」（予後の善し悪し・出入の会を修繕する）とよむことになる。動詞の共用ならば（予後の善し悪しに対処し、出入の会を修繕する）とよむ。

③順行・逆行

天文学に惑星の順行・逆行という現象がある。惑星が東から西へ運行している（順行）のに、

Z状に逆もどりしている（逆行）ように見えること（ウィキペディアに、火星の逆行現象が紹介されている）。

たとえば、『靈枢』邪客篇に「此順行逆數之屈折也」（以上が順の義理・逆の道理をいう屈折である）とあるのが逆行・順行と解釈できる部分で、邪客篇に「天円地方、人頭円足方以応之、天有日月、人有兩目」とあり、著者は天文知識を有していると思われる。

経脈でいえば、順行とは円滑であること。逆行とは、留滞していること。

「手太陰之脉、出於大指之端、内屈循白肉際、至本節之後大淵、留以澹、外屈上於本節之下、内屈、與陰諸絡、會於魚際、數脉并注、其氣滑利、伏行壅骨之下、外屈出於寸口而行、上至於肘内廉、入於大筋之下、内屈上行臑陰、入腋下、内屈走肺」「心主之脉、出於中指之端、内屈循中指内廉、以上留於掌中、伏行兩骨之間、外屈出兩筋之間、骨肉之際、其氣滑利、上二寸、外屈出行兩筋之間、上至肘内廉、入於小筋之下、留兩骨之會、上入於胸中、内絡于心脉」と説明する。

「其氣滑利」を挟んで、前半は紆余曲折して循行し（逆行）、後半は円滑に循行している（順行）。前半の「留」（循行の留滞）や「伏行」（深部への循行）が、逆行の箇所と思われる。

邪客篇には「逆・順」だけでなく、「出・入」という文字も見えているので、「**營其逆順出入之会**」は、邪客篇に基づいて解釈することもできる。また、邪客篇の循行は、『靈枢』本輸篇と同じく指先から始まっているので、近い関係にあり、「出入の会」は手足の要穴と考えられる。

◎つまり、「營其逆順出入之会」は、手足の、出と入の間の、経脈の屈折の所を營（治療）する、と解釈でき、手足の要穴で蔵府の治療をすることか、と考えられる。が、推測が入り込み、回りくどい解釈になっているので、とても良い解釈といえないかも知れない。

④偏義詞

逆順は偏義詞で、逆だけの意味を持ち、乱れの意味と思われる。『素問』痿論「各補其榮而通其俞。調其虛實。和其逆順筋脈骨肉。各以其時受月。則病已矣」に対し、多紀元簡は「此言逆順。亦是不順之謂。義始通」（ここの逆順は、不順をいうもので、そうすると意味が通じる）という。

乱の意味は、『素問』調經論に「氣亂於衛、血逆於經」（気は衛に乱れ、血は経に乱れ）とある。

◎この中の「和其逆順筋脈骨肉」（乱れを筋脈骨肉において調える）が「**營其逆順出入之会**」と良く似ているので、「乱れを出入の会で修繕する」という意味になる。かみ砕けば「経脈の乱れを、経脈の往来の場で修繕する」となるが、「通其経脈」と代わり映えない。

【出入の意味】

①出入り（体内へ入り、体外へ出る）

「出入の会」とは、正気出、邪気入の場所を言う。この場合、「会」は「合」と同じで、合戦、交戦、わたり合っている場所。

『靈枢』百病始生篇「風雨寒熱、不得虚、邪不能獨傷人」（風雨寒熱の外邪は、体に虚がなければ、侵襲することはできない）とあり、外邪（侵入）と正氣（洩れ出ている）の関係を「出入」といい、正氣が洩れ出て、外邪が入っている場を「会」という。『靈枢』小鍼解に「在門者、邪循正氣之所出入也」（門に在りとは、邪氣が正氣が洩れ出た所から親友すること）とあり、衛氣出を正氣出に替えている。『素問』刺志論「實者氣入也、虚者氣出也」（実は氣が入っている。虚とは氣が出ている）も、衛氣（正氣）出、邪氣入と解釈できる。

②経脈の起点と入点

経脈がスタートするところを「出」、経脈が体幹に入るところを「入」という。「出入の会」とは、経脈の出る場所、入る場所を言う。

『靈枢』邪客篇に「脉之屈折出入之處、焉至而出、焉至而止、焉至而徐、焉至而疾、焉至而入」とあり、脈の、屈折するところ、出入りする所、どこに至ると出て、どこに至ると止まり、どこに至ると徐やかに、どこに至ると疾やかに、どこに至ると入るのかといい、具体的には「手太陰之脉、出於大指之端」「入於大筋之下」「入腋下」とあり、指端から出て、肘窩・腋窩に入る。

③往来（行き来）と同義

「出入」は「往来」と同義で、「出入の会」は往来の会合点。

修辭法の避復（上下文に同義の表現が重出するとき、同じ表現を避けること）だとすれば、往来と出入は同じ意味になる。『難経』も組み合わせると、往来、出入、流行が同じ意味になる。

『靈枢』本神篇の「隨神往來者、謂之魂、並精而出入者、謂之魄」（神と往来するのが魂で、精と往来するのが魄である）

『難経』七十二難「所謂迎隨者、知榮衛之流行、經脉之往來也、隨其逆順而取之、故曰迎隨」

◎「營逆順出入之会」が「経脈の往来の逆乱している場を營する」と読むこともできるが、これならば前句の「通其経脈を」と同じであるので、出入を往来とは解釈できない。

【ちなみに往来】

①往来（行き来）：（双方通行で）往復がある。

②往来：（一方通行で）経脈の流れ（流行）。動脈の流れ。

③病気の進行

「来期」とは初発から病勢盛んになる期間。「往期」とは病勢が衰える期間。